

## 大伴坂上郎女像の変化を追って (一)

古 庄 ゆき子

大伴坂上郎女に関する研究―作家論、作品論―が、どのような人々によって、どのような方法で行われてきたかを、戦後にかぎって考えてみたい。

敗戦間もない昭和二三年、尾山篤二郎氏は『大伴家持の研究』<sup>注一</sup>を出版した。出版は、二三年であったが、これが書かれたのは、第二次大戦中の、「もうこれは往くところまで往かねばと観念せざるを得なかった」状況の中で「何れにせよ吾々はお役に立たない、とすると堅く門戸を閉して何かに熱中するより致方がない」という思いに駆られた時期の著者の仕事であった。長すぎる紀文の引用、とくに大伴氏の命運とかわつた広嗣事件および奈良麻呂事件に関する項のそれは、この事件そのものを「謀反」「不敬」にわたるものと断じかぬない当時の軍人や情報局の役人に対して「本文をそっくり

写す」方法で「堂々と諍ってみよう」<sup>注二</sup>とするところから、出たものであった。

内容は「大伴氏概観」にはじまり、家持の生きた時代の権力内部の政治状況を主とした「青年期の家持と橘氏」「広嗣の事変と伊勢従駕」、大伴氏の「故郷」やその田庄のあった竹田、跡見の地理・歴史的考察、大伴氏と通婚している巨勢、石川氏の居住地の探求をも含む「大伴氏大和古跡考」、そして「大伴ノ坂上郎女考」「大伴家持の母の研究」「大伴家持の往来歌」等であり立っている。

尾山氏がここで大伴坂上郎女に関して多くを語り、家持の母や家持をとりまく女たちへかなりのスペースをさいたのは注目してよいことだろう。

一世を風靡したといわれる保田与重郎氏の『万葉の精神』<sup>注三</sup>もまた同時期に書かれ、これはいちはやく一七年に出版された。

家持の歌を「草莽の臣の志」を展開したものと見、「最も政治的であることが、つひに最も浪漫的である時代がきたのである」と叫ぶこの著者は、一方で「土着と環境と土俗」を高唱するのだが、万葉人の生活の具体的姿にはふれないのである。もともと彼の「土着」「土俗」とは生活の具体性を指すものではなかった。「家庭と文化」の項を立てて「家持成長期の佐保の相伴家は、女性的な家庭だった」ことを指摘、それが「彼の思想文芸の風貌の一面をあらはさぬわけでもない」といつつ、「これはさして第一義の重大なことではない」と考えるのである。ここで彼の「女性的」というのは「柔弱な、さうして常に心の定まらぬ、感傷的な」という程のものであった。

これに比べて相伴氏の「故郷」や田庄の所在を明らかにし、婚姻関係をさぐる尾山氏のものからは、もっと土の匂いのする彼女の像や生活がおぼろげながら見えてくる。

「相伴ノ坂上ノ郎女考」は、彼女の相伴氏内における位置、相聞贈答の相手、婚姻の相手の出自や官職の証明、異母兄旅人との婚姻関係の有無、娘婿になった駿河麻呂との間に交わされている彼女自身の相聞歌を通しての両者の関係の考察、彼女の所有地、田庄の問題等々多岐にわたっている。この中で当時の一般的評価のように彼女を「多淫者」とも「退廃」ともとらえず、駿河麻呂との関係も資料の限界を理由に不問に付すという姿勢を持っているのが特徴である。

素朴ではあるが当時の婚姻の独自性というような視角もみられる。ただそれは婚姻史全体を見通して、その撰取の上に立っての発言などではなかった。高群逸枝の『母系制の研究』が世に問われてすでに久しかったが、それらに学んだようすは見えない。文献に忠実で、丹念に資料をよんだこの先学のおのずから到りついた知識であったと思われる。しかし、これが現代の婚姻関係で古代を推測するというような独断を防いだのであろう。

ともかく尾山氏の素朴な形で提起した問題には、うけつぐべき多くのものがあつた。

昭和二〇年代の相伴坂郎女についての理解―それは古代の女性作家研究に共通していたが―は、一般にまだまだ粗雑、幼稚であつた。

彼女の作品に類似歌、類想歌の多いところから、直ちに個人的歌人か否かという問題設定をした五味保義氏においてそれを感ぜし、彼女を「多淫者」と口をきわめて悪罵した川田順氏にそれを感ぜる。

二九年に『万葉集大成』全二〇巻が刊行されたが、その巻10収「相伴家持」で川田順は相伴坂上郎女にふれて、坂上郎女が徳積皇子に初婚し、麻呂に再婚し、宿奈麻呂に三婚したまでは史実である。その後、老婆となり終るまでの間に於いて、おのれの娘（坂上弟嬢）への求婚者相伴河麻呂と肉交し、相伴百代とも中年の恋をささやき、異母

兄の旅人にも嫁したらしい。なお試みに大日本史列伝の部を見ると、「大伴の安麻呂の次女なり。頗る色を好む。初安倍蟲麻呂と婚す。後大伴宿奈麻呂に配す。坂上大嬢、坂上小嬢の二人はその間の子ならん。離別の後、大伴駿河麻呂と婚したるが如し。後、坂上小嬢を駿河麻呂に嫁して、自らは断念したり」とあるが、記事不正確の点あるも、参考に値する。要するに穗積皇子に娶られた時代だけが純真の女性であつて、皇子薨去後の彼女の生活は、万葉女流中随一の放縦者多淫者、平安朝和泉式部一味の紅袴者流といへども<sup>注九</sup> 跳で逃げ出さねばなるまい。

と書いてはばからなかった。当時の貴族社会における婚姻関係の上に立つて考へることもなく、直ちに家父長制下の目で彼女を「多淫者」ときめつける川田氏の論はそのことにおいて間違っているだけでなく、作家論としても全く意味をなささないものであつた。

しかもこれは当時田川氏だけのものではなく、『万葉集大成』巻5にみられるすぐれた古代史家藤間生太氏の論考もまた同様であつた。氏は

彼（旅人）<sup>筆者注</sup>の妹である坂上郎女も才女であつたが、自分の娘と結婚した男性と通じるほどの人間でもある。頽廢的な人間であることは明白である。<sup>注一〇</sup>

と評した。

それがそのように「明白」な事実なのかという問いを發し、

更にそれが事実だとしても

「二嬢が死んだあとでもあれば、そこにはならぬ道徳的退廢もありえないだろうことは、彼女を取り巻く婚姻関係の在りかたからいって推察されるし、そうした歌が「万葉集」に公然ととり入れられている事実がそれを物語る」

として藤間氏に反論、古代の婚姻関係の中に彼女のそれも位置づけて考へること、彼女の「退廢」を個別のものとしてではなく、奈良朝貴族のそれとして理解すべきことを提起したのは吉野裕氏<sup>注一一</sup>であつた。三〇年代初頭である。

吉野氏は坂上郎女のうたのよみ方に新しい見方を提示した。つまり彼女を「女歌の名人」とし、

めんめんたる恋歌めいた歌を私たちが彼女から受けることがあつたとしても、はやまってへ通じようとしたら、おそらく「結の辱」<sup>注一二</sup>をかくであらうといふのである。

尾山、川田、藤間氏は研究方法、視角がことなりながらも、歌のうけとり方で奇妙に一致して、相聞歌の存在は直ちに関係の成立とみていたのである。

昭和三十一年一月号「日本文学」に掲載されたこの吉野氏の論文は彼女を「大伴家の没落をささえようとする坂上郎女の〈家刀自〉的性格」と「歌体や題材の広さという点で柿本人麿のみが匹敵するという状態」に文学的、人間的つながりを見る点、彼女の歌に「農耕者的修辭をもつた歌が比較的多い」

ことを指摘し、「この〈家刀自〉はけつして殿中深く御簾を掛けてまどろむほど退廃しておらず、田庄などに出て采配をふるつたらしいから勤勞民衆との接触は男性貴族などより多かつたと考えられる」と奈良朝女貴族の生活とうたの独自の性をみている点、万葉の編集者と目される家持と彼女を姑姪の關係ばかりでなく「家持の作家活動をつちかい推進させた精神的母胎」として郎女の位置を、把えようとする点等々まさに画期的であつた。

氏は在来の大伴坂上郎女研究が「へ才人」とかへ才気かんぱつの女流歌人」とか評してきた文学史家の「きまり文句」を、「文学的にも人間的にも無内容で薄手な言葉」としてしりぞけ、古代貴族の族的關係の中に彼女の人間像を求め、作歌活動をとらえようとしたのである。

氏の発言は坂上郎女論を作家論に堪えうるものに高め、歴史条件の中において人物や作品を理解することを示したものである。

奈良朝貴族と平安朝貴族の歴史的性格のちがいの分析の上  
に立つて、平安朝女流作家の性格を明らかにし、それを平安朝女流文学解明の基盤にすえた西郷信綱氏の「平安女流文学の問題」<sup>註三</sup>は既に二四年に書かれていた。

その中で西郷氏は坂上郎女についても言及し、彼女の大伴氏内部で果している役割の大きさ、私有の領地をもち、自らそれを管理さえしている生活・その生活のありようによって

保証されている社会的地位の高さにもふれているのだが、平安朝女流作家の歴史的な性格分析に主題をおいたものであるために、奈良朝貴族―その一つの典型としての彼女の問題が、それとの比較で派生的に出されているにすぎなかつた。奈良朝の女流を扱つたものでもなく、坂上郎女の問題を中心にしたものでもなかつた。この点吉野氏は奈良朝貴族そのものの性格を論じ、その中の女のありようとして坂上郎女の生活を正面から明らかにしようとして試みたものであつた。氏の論考の画期的なものである理由はそこにあつたのである。

同じ三一年には大伴坂上郎女研究にとつて今一つ画期的研究が出された。この年の「解釈と鑑賞」一〇月号に書かれた石母田正氏の「万葉時代の一側面」がそれである。氏は大伴坂上郎女、竹田庄にて作れる歌二首

然とあらぬ 五百代小田を茹り乱り

田廬に居れば 京都し念ほゆ (巻八・一五九二)

隱口の 泊瀬の山は 色づきぬ

時雨の雨は 零りにけらしも (巻八・一五九三)

右天平十一年己卯秋九月作

坂上大嬢、秋の稲の藪を大伴宿禰家持に贈れる歌一首

吾が業なる 早田の穂立 造りたる

藪ぞ見つつ 惚ばせ吾背 (巻八・一六二四)

大伴宿禰家持の報へ贈れる歌一首

吾妹子が業と造れる 秋の田の 早稲の藪

見れど飽かぬかも (巻八・一六二五)

又、身に著けたる衣を脱ぎて、家持に贈れるに報ふる歌一首

秋風の 寒きこの頃 下に著む 妹が形見と

かつも惚はむ (巻八・一六二六)

の五首の解釈・鑑賞・分析を通して、田庄の生活などによっていまだ生産生活と分離しきっていない奈良時代の貴族生活—とりわけその生活を濃くもっていたと思われる女貴族—を明らかにしている。

従来歴史家は文学作品をそれ自身の構造や性格・感情や論理の質によってではなく、外面的・部分的に史実解明の道具・証拠として利用する傾きがあったが、石母田氏はここで歌そのものの鑑賞を通して歴史事実の解明にいたるといふ、文学作品の正しい理解の上に立った研究を提示した。文学の側からみてもまことに説得性の高いものであった。吉野・西郷氏が文学の側から歴史学との正しい関係を志向し、その成果をあげたのに対応するものであったといえよう。

文学作品の鑑賞を経てしかも歴史の側からアプローチした石母田氏、歴史的考察の上に立ってしかも文学の側からアプローチを試みた西郷氏、吉野氏であったが、三氏に共通する点は、古代の生活の基底部にあって歴史を支えるものとしての女たち、中国文化、貴族文化にいまだ影響されない在地的エネルギーの保持者としての女たちの発見、その役割の評価

であった。大伴坂上郎女の文学、その歴史的 성격はこの三氏によってかなり具体的に論証されたといつてよい。三〇年代は大伴坂上郎女研究にとって大きな画期であった。

しかしこの成果は全体として受けつがれることにならなかつた。むしろ三氏の描いた古代の族的生活の中で、いまだ農耕生活と手を切れずにいる「健康な」郎女像は否定されていった。

四七年小野寺静子氏は「怨恨の歌—大伴坂上郎女の志向する世界」<sup>(注一五)</sup>を書いた。ここで小野寺氏が見たのは、「言葉」が力を持ち得た時代にたち帰ること」を志向しながらも、すでに「言葉」がその力を失っていること」「現実にはそうした世界が崩壊し去つたものであること」を「知つた人」という郎女像であった。

ややおくれで四九年から雑誌「図書」に「怨恨歌」を中心にした大伴坂上郎女論を書きつづけた寺田透氏は小野寺氏の説を大筋として是とされ、彼女の中に喪失しつづつあるものを維持しようとする「胸廓の大きい古代のひとりの女性」をみている。

つまり氏は

すべて意識的に、知的に、自分の大きさが犠牲にされることを余儀ないことと見る方向に、ひとびとが向い出しているかに見える奈良時代の末、ひとりの古代的なものを身に添えて持ち、それを維持しようとする胸廓の大きいひとり

の女性という風に思われる……<sup>注一七</sup>

といい、さらに

郎女の古代性は幻像であり、それをかの女はかの女の矛盾する諸要素の組合せから造り出し出しているということであった。かの女の性的潤達と世上普通に信ぜられていることも、歌垣の幻像を、同族のあいだで作り出そう<sup>注一八</sup>というかの女の歌人としての試みの結果ではなからうかとまでいう。

西郷・吉野・石母田氏にとつて彼女の古代性は事実の問題であつたが寺田氏によれば「幻像」であり、せいぜい彼女の中の「官能的な、均衡であつたかも知れないもの」にすぎない。寺田氏の郎女は「古今集」<sup>注一九</sup>「少くとも業平や小町の「古今集」がまじかに眺められる地点」に立っている。

すでに彼女の中に「みやび」<sup>注二〇</sup>を見ていた青木生子氏、彼女の類歌に本歌取りの手法があつたし、当時の貴族の生活が、「第一義的伝達しか考えられないような、余裕のない、土くさいものではなかつた」と見る久米常氏氏によつて開かれた道を、更にほりすすめたものといえよう。

昭和二〇年代の粗雑な郎女論からすれば、三〇年代、四〇年代と、作品の読みも解釈もきめ細かになり、彼女の方法についての考察もすすんでいる。しかし三〇年代に吉野氏、石母田氏によつて描かれた、土くさく、古代性を生きている大

伴坂上郎女像から、小野寺、寺田氏によつて把えられた孤独な影を引く郎女像への変化は、単なるよみの深化とだけ言えるであらうか。

注一 尾山篤二郎著、「大伴家持の研究 上」昭和二十三年十一月一日大八洲出版株式会社刊。

注二 「大伴家持の研究 上」序

注三 保田与重郎著「万葉集の精神」は筑摩書房から昭和十七年六月十五日に刊行されている。

注四 「万葉集の精神」収「万葉集と家持」P 7

注五 「万葉集の精神」収「家庭と文化」P 184

注六 「大伴家持の研究上」に「大伴ノ坂上ノ郎女考」附大伴伴駿河麻呂として収められている。

注七 高群逸枝の「母系制の研究」は昭和十三年六月に厚生閣から第一版が刊行されている。

注八 五味保義氏「大伴坂上郎女」「万葉集大成10」に収められている。なお氏のあげる坂上郎女の類似歌、類想歌についての考え方に筆者はいささかの批判を試みている。「大伴坂上郎女の歌をどうよむか」(一)類似歌・類想歌を中心にして(一)(梅光女学院大学国文学会誌「国文学研究」第四号)

注九 「万葉集大成10」P 167

注二〇 「万葉集大成5」P 266

注二 吉野裕氏は「日本文学」一九五六年一月号に「大伴坂上

郎女の場合―「結の辱」考―」をかいたが、これは同年四月刊の同氏著「防人歌の基礎構造」（お茶の水書房）に収められている。

注三 「防人歌の基礎構造」P 209

注三 昭和二四年八・九月号「文学」に掲載され、三〇年一月に出版された西郷氏著「日本文学の方法」に「宮延女流文学の開花」として収められた。

注四 「万葉」第七十九号収。

注五 昭和四七年から八年にかけて雑誌「図書」に掲載され、五〇年四月に「万葉の女流歌人」として岩波新書に入った。

注六 『万葉の女流歌人』P 55

注七 「万葉の女流歌人」前説P iii

注八 「大伴坂上郎女」「上古の歌人」（日本歌人講座I 弘文堂新社 昭和四三年一〇月刊）収。

注九 「万葉集贈答歌に於ける本歌取りの傾向―藤原麻呂と大

伴坂上郎女の場合―」「美夫君志」二号）

「大伴坂上郎女」「万葉の歌人」（和歌文学会編 桜楓社 昭和四十四年五月刊）収にもくわしい。